

# 「御柱祭」を通じて地域の お客さまとの信頼関係を築く

**お客さまや建設工事会社との  
信頼関係の積み重ねが  
相互の満足度を高める**

大勢の男たちを乗せた太さ約17m、長さ約17m、重さ約10トンのモミの巨木が、足がすくむほどの急斜面を一気に滑り落ちる。土煙を上げながら猛然と下る「木落し」。こそ、「どうせ乗るなら木落しお乗り、諏訪の男の度胸ためし」と唄われる、「式年造営御柱大祭」、通称「御柱祭」の最大の見せ場だ。数えて7年ごとの寅と申の年に長野県の諏訪大社を拠点に行われる。申年の今年は、4月に御柱を山から里へ曳き出す「山出し」、5月にその御柱を神社までの道中を曳いて社殿に建てる「里曳き」が、国内外から大勢の見物客が集まる中、賑々しく執り行われた。



「諏訪大社下社秋宮一之御柱」を地域の方と力を一つに曳行した。(右端が小池)

中部電力の諏訪営業所にも、氏子としてこの大祭に参加する社員が数名いる。その一人が配電建設課の小池秀樹だ。1年前に行われたモミの大木の「切り出し」から、「山出し」「里引き」に至るまで、地域の一員として祭りに加わった。

「約10トンもの御柱を人の力だけで曳くわけですから、体力的には大変

厳しいですね。しかし、多くの人の力を一つにして御柱を曳く様子は、人を感動させ湧き上がらせる力を持っていると思います」

普段の小池が担っているのは配電設備の建設業務だ。担当地域内での家屋・店舗の新築・増築などに伴う電柱や電線などの配電設備の新設や移設などを行っている。

「自然環境に恵まれた諏訪湖周辺は、美しい景色を求めて別荘にみえるお客さまも多くいらつしやいます。そのため、配電設備がお客さまの視界になるべく入らない場所に建設や移設をするなど、お客さまの立場に立った設計を心掛けています」

さらにこの仕事では、現場におけるお客さまや建設工事会社の方々の「信頼関係」も重要なポイントだ。

「あるとき電気の新規申し込みがありお客さま、建設工事会社の方と

現地では折衝する場面がありました。付近は山林で、電柱、電線を新設するルートを検討し、最適だと思ったのが木の生い茂った場所でした。大規模な伐採が必要になることを説明し、協議した結果、日頃から信頼関係がある建設工事会社の方が「お客さまにとって、このルートがベストなら、うちが伐採してあげるよ」と請け負ってくださったんです。こうした日々の仕事の信頼関係の構築がお客さまにとって、よりよい仕事につながる気がかされる、貴重な経験でした」という。

「お客さまと直接折衝する機会が多いのも私の仕事の特徴。初期対応ひとつで会社のイメージもガラリと変わってしまうので、常に基本に忠実に、何が一番大事かを再認識しながら取り組むよう心掛けています」

電柱や電線の新設は、今後10年、



## 〔長野支店 諏訪営業所〕

諏訪湖を中心に管轄エリアは南北、東西に広がる。エリア内人口は21万9000人(2014年3月末現在)、架空配電線の総延長1290km、配電線を支える電柱の数約6万基、変圧器約2万9000個。エリアのほとんどが盆地内のため夏暑く冬寒いのが特徴。約100名の従業員が所属する。



小池秀樹(こいけひでき)  
 中部電力長野支店諏訪営業所配電建設課  
 建設グループ。1997年入社、長野営業所配  
 電技術グループに配属。'99年豊科営業所  
 配電課、2002年佐久営業所配電課を経て、  
 '06年諏訪営業所配電建設課へ。'09年から  
 3年間松本営業所木曾福島サービスステ  
 ヂョンに赴任し、'12年に現職に戻る。諏訪大社  
 下社御柱祭「東山田長持ち保存会」会員。

## Voice of the spot



専用の計測棒で電柱、配電線の高さを測る。

新築現場の駐車場予  
 定地に立つ電柱の支  
 線移設についてお客さ  
 まからの相談を受ける。

「私がやるべきことは、自分の仕  
 事を全うすること。そうすることに  
 より、常にお客さまから「信頼され  
 る会社」を選ばれる会社」でありた  
 いと思っています」  
 被災地で、被害を被っているお客  
 さまから「忙しいのに悪いねえ、あ  
 りがとうね」など思わぬ言葉をかけ  
 られたときは、嬉しさと申し訳なさ  
 とともに、この仕事の地域とのつな  
 がりの深さを実感するという。

20年と残っていくことを前提に、設  
 備管理面、コスト、地形、今後の需  
 要見込みなどを総合的に考え、お客  
 さまや近隣住民の方々とにかくに納得  
 していただけるかを第一に設計を行  
 わなければならぬ。「だからこそ、  
 電柱などの設備を、お客さまの要望  
 に沿って設置できたときはこの上な  
 い充実感がある」という。  
**お客さまに選ばれる  
 会社となるよう  
 メンバー全員が心を一つに、  
 自分の仕事を全うする**

「親父とラーメン屋で食事中に、  
 突然店内が停電になったとき、店主  
 が自分のクルマを動かしてヘッドラ  
 イトで照らしてくれました。それ  
 まで『電気はついて当たり前』と思  
 っていたのが、実は当たり前のこと  
 ではなかった。電気の大切さや停電  
 した時の影響の大きさを身をもって  
 体験したことで電気に興味を持つよ  
 うになり、結局高校も電気科を選び、  
 その後の就職にいたしました」  
 1997年に中部電力に入社。以  
 来、配電畑を歩んできた。  
 小池にとって忘れることのできな  
 い出来事がある。諏訪営業所に転勤  
 してきたばかりの2006年8月の



配電建設課では、縦と横のコミュニケーションを円滑に図るためのミーティングがひんぱんに開かれる。

ことだ。その少し前にエリア内の岡  
 谷市湊地区で、死者7名を出した豪  
 雨による土砂災害が発生した。  
 「すぐに被災地に派遣されたので

すが、多くの家屋が流され土砂に埋  
 まり、地形が大きく変わってしまった  
 た光景を見て愕然(がくぜん)としました」  
 ただちに現場復旧要員と共に現場

に入り、電柱・電線の復旧設計に取  
 り組んだ。転動後しばらくはその仕  
 事にかかりつきりだった。「1分1  
 秒でも早い復旧」を、グループはも  
 ちろん営業所のメンバー全員が目指  
 し、心を一つにして作業に当たった。



小池は今年5月半ばに行われた諏訪大社下社御柱祭・里曳きの「長持ち行列」に初めて参加した。(前列左が小池)



御柱祭を通じて築いた人間関係は小池にとって何ものにも代えがたい。(前列右が小池)

「御柱祭」から学んだ  
教訓を業務に活かして  
お客さまにプラスαの対応を

「御柱祭」に参加したことも、地域に溶け込む大きなきっかけになった。小池は長野県青木村の出身で、もともと諏訪に縁はなかった。

「諏訪に転勤して入居した社宅がたまたま下諏訪町で、諏訪大社下社の春宮も目と鼻の先。当然のように御柱祭に興味を持つようになりまし

た。新参者にもかかわらず地域の方々が温かく迎え入れてくださり、

「諏訪に転勤して入居した社宅がたまたま下諏訪町で、諏訪大社下社の春宮も目と鼻の先。当然のように御柱祭に興味を持つようになりまし

た。新参者にもかかわらず地域の方々が温かく迎え入れてくださり、

「地域を少しでも盛り上げたい」「仕事以外にも何か貢献できることはないか」という気持ちが高まりました」その後、09年から3年間は家族を残して松本営業所の木曽福島サービスステーションに単身赴任。12年に諏訪に戻ったのを機に、下諏訪町にマイホームを購入した。地元の東山田地区は図らずも、「長持ち」で唯一諏訪大社の境内に入ることが許されるなど、諏訪地域で最も由緒がある」とされる「東山田長持ち保存会」のお膝元だった。

「しかもお隣が保存会のメンバーで、誘っていたら私も入会することができたんです」

小池は、今回初めて下社御柱祭「里曳き」の長持ち行列に参加した。ちなみに諏訪の「長持ち」は、御柱の「里曳き」を華やかに彩る重要な行列を担っている。一つの長持ちは約200キロ以上に及び、前方2人、後方1人の計3人で長い道中を運んでいく。重さもさることながら、担ぎ方や足の運びなどの所作が決まっており、特に前方2人はそれをびつたりと合わせなければならぬ。そのため、厳しい練習を何度も繰り返して本番に臨む。

「同じ目標に向かって厳しい練習を乗り越えたからこそ、一体感が生まれ、地域にはすぐに溶け込むことができました。指導していただいたのは過去に長持ちを担いでいたベテラン指導者や保存会会員。そのほかにも保存会の仲間には、事務職、学校関係、行政など、普段の仕事では出会えないさまざまな方がいて、自分が持つていない知識や技術を学ぶことができる貴重な場でもありま

す」

「御柱祭」は危険が伴うということはよく知られているが、それだけに、自分だけでなく仲間の安全も守るため、周囲の状況に注意しながら声を掛け合うなど、安全への取り組みは徹底している。少しでも危険に近づいたらそうなる行動があればすぐに先輩から「飛ばす」。

「それは私の普段の仕事にもそのまま当てはまります。段取りや取り扱いを間違えると、すぐにお客さまにご迷惑をおかけしてしまいます。『安全は会社の資産』と位置づけ、御柱祭のように一人ひとりが安全への意識を高め、熱い気持ちで仕事に取り組んでいきたいと思っています」

電力自由化の時代となり、お客さまや社会の期待に添えていくためには、今までやってきたことを同じようにやってもだめだと小池はいう。

「常にプラスアルファの対応で、私も御柱祭のようにお客さまに感動を与えられるような仕事をしたい」

そうした言葉が出るのも、「御柱祭」に真剣に取り組み、真の感動を味わったからかもしれない。

